

新刊紹介

手し、一部はダウンロードして利用できるようになってきたし、また大容量の電子媒体（CD-ROM、MOなど）の統計情報が提供・利用されるようになってきた。統計が何を語っているのか、統計の正しい理解と利用がますます重要になっている。

本書の構成は、人口、土地、労働、生活、物価、社会保障、地域、ジェンダー問題、環境、企業、産業、財政、金融、国民経済、貿易・世界経済の15の大項目と64の中項目からなっている。労働の分野では、就業状態、賃金、労働時間、労働災害・職業病、労働組合が中項目として対象にされている。各分野の諸統計の源泉（出所）と内容、その意義と限界が、諸統計のつながり（統計体系）においてわかりやすく具体的に解説されている。また社会問題研究との関係において多様な統計指標（失業率、有効求人倍率、賃金指数、死亡率、労働災害率など）がいくつかの図表入りで丁寧に説明されている。さらに各統計ガイドとして内外の関連文献とともに統計情報のインターネット・サイトも紹介されている。

本書は、情報化の進む現代社会において、統計情報の正しい理解と利用を広めるのに役立つ統計の解説書・ガイドブックであり、研究者、学生、市民の多数の「座右の書」であるといえよう。

（大月書店、1998年3月刊・3800円）

（岩井 浩・会員・関西大学教授）

宮原寿男著

『「世界の日立」に挑む』

田中秀幸さん（57歳）は日立製作所から、残業拒否を理由に解雇され、以後30年余にわたって闘い続けている。この本は、その田中さんの闘いを、母や妻など家族との葛藤にまで踏み込んで描いている。そうすることによって、大企業の労働者支配の非情さがいっそう際立ち、田中さんの生きざまが見事に浮き彫りにされることになった。

田中さんを解雇した日立・武蔵工場は日本における初めての半導体量産工場として設立され、高度成長を謳歌してきた。職場には若い女性が溢れ、女子バレーでも有名になった。その工場が成長する過程で、どのような労務支配を続けて来たのか。巨大企業の明に対する暗、真実の姿がリアルに描かれる。

臨時工などの相次ぐ解雇、それに抗して闘う田中さんら青年労働者の姿が生き生きと躍動する。同じ時代に同じ電機労働者として生きて来た筆者の思いが伝わってくる。

本訴第1審で勝っていた裁判が、なぜ東京高裁で逆転し、最高裁がそれを追認したのか。司法の反動化を具体的に実証する過程も興味深い。過労死まで生まれる、超過密労働が常態化する中で、残業を強制力あるものにしたいという企業の強い欲求を受けて、最高裁の指示のもとに「裁判官会同」が開かれた。それが、田中事件高裁の直前である。その「会同」の責任者が、東京高裁の敗訴判決を指導し、さらには最高裁に昇進して、田中さんの上告を棄却したのである。

最高裁の不当判決は労働者を無制限の長時間労働に追いやるものと、マスコミも一斉に報道し、海外からも厳しい批判が相次いだ。98年4月には、国連人権小委員会でも取り上げられ、日本の司法のあり方に大きな関心を引き起こしている。

しかし、田中さんの闘いは、最高裁で負けたあと、全労連の当時の大江議長が共闘会議の責任者となり、大きく発展することとなる。合わせて、日立の職場で田中さんの支援や、労働組合活動強化のために奮闘して来た仲間たちが、次々と裁判所や労働委員会に提訴して、新たな闘いを開始した。日立を攻める態勢が強化され、運動が広がる中で、田中さんは自らの生涯をかけて訴え続けて来た「解雇撤回」に今確信を深めている、という。日本経済の高度成長からバブル崩壊まで、巨大企業を相手に仲間とともに闘い続けて来た田中さんの熱い思いに感動する。

闘いの最中に、しかもその山場で出版された本である。一気に読める面白さであり、一人でも多くの人に読んでもらいたいと思う。

（学習の友社・1998年3月刊・1714円）

（中山森夫・電機労働者懇談会事務局長）